

の組合総会の席上で放流調査の主旨を云え、再捕報告の協力を依頼した。また1回目放流当日に放流海域に隣接する釣具店、商店、海岸など約50ヶ所や関係市町村・漁協に再捕報告依頼のポスターを掲示した。さらに名護市の公報紙にはポスターを記載してもらった。羽地漁協の仲尾次地区では月に2~3回の調査の際には直接、漁業者に再捕の有無を聞いた。

しかしながら10月7日に羽地内海周辺で行われた釣り大会で、遊漁者が放流魚を1個体釣って再放流したらしいという仲尾次地区の漁業者の話が1件あるだけで、このほかには人工種苗放流魚の再捕に関する情報は得られていない。

d) 放流魚の摂餌

2回目放流後1日目と2日目に放流点の大群と周囲の岩についている小群の中から、それぞれ数個体を捕獲して胃内容物を調べた。捕獲はナイロン製の一枚網に追い込む方法によった。この方法では、ハマフエフキ天然幼魚を捕獲するのは極めて難しいのに対して、放流魚は容易に捕獲できた。

標識装着魚と腹鰭抜去魚を含む尾叉長62.6~98.7mmの25個体の胃内容物を調べたところ、ほとんどの魚も空胃であった。またどの魚も腹腔や消化管の周囲に脂肪が多くみられた。

人工種苗ミナミクロダイの人工種苗では、放流後1日目から何らかの天然餌料を摂餌している個体が見られる（渡辺ら、1983）のに対して、今回の放流魚は放流後2日目でもまったく摂餌していない。脂肪の量からみて、放流魚は摂餌できないほどの飢餓状態ではないし、周囲に他種天然魚もいることからこのあたりに餌がないとも思われず、天然環境に不慣れなために天然餌料の食べ方を知らないのであろうか。今後詳細に検討する必要がある。

e) 観察測線上の放流魚の水平分布と個体数の減少

観察測線上の分布からみる限り、放流魚は1回目放流後は北西~南西方向へ、2回目は東~南方向へほぼ逆方向に分散した（図9、12）。放流時は1回目低潮の張潮時、2回目ほぼ満潮で落潮に向う時であった。放流点付近での潮流観測の資料はないが、今回の観察や別の調査時には張潮時には西方向、落潮時には東方向の潮流を体感している。放流魚の分散方向と放流時の方向が一致している。

このことは、放流魚は遊泳能力は十分にあるが、放流直後は周囲の環境に不慣れなことから定位能力が乏しく、その結果潮流に流され分散する。しかし、その後短時間のうちに定位能力を高めて自身のいる場所や付近の岩などに定位するとも考えられる。放流魚の放流直後の分散方向は、放流時の潮流の方向に左右されることを示唆しているのかもしれない。

1回目、2回目ともに測線上で観察される放流魚の個体数は日ごとに減少している（図9、12）。これは、観察範囲が十分に広くなく、測線も密ではないので、放流魚が観察範囲外へ逸散したり、測線間において線上からは観察されなかったことによるとも考えられる。しかし2回目放流後の2~5日目に放流点付近で捕獲した魚食性魚3種7個体のうちの2日目のマダラエソ1個体が放流魚を2個体捕食していた（表5）。また放流点付近には表5の魚種のほかに、